

浦賀文化

平成18(2006)年10月1日

第8号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行:横須賀市浦賀文化センター

〒239-0822 横須賀市浦賀町 7-1

TEL&FAX 046-842-4121

恒久平和の願い後世に!

浦賀港引揚記念の碑

横須賀市は、悲惨な歴史の再認識と、五十六万余人の引揚者や市民の思い、そして恒久平和の願いを後世に語り継ぐために、西浦賀みなど緑地に浦賀港引揚記念の碑を設置し、除幕式を十月七日(土)に行なう。

陸軍棧橋で、釣り糸を垂れる人がいます。造船所の巨大なクレーンやいくつかの建物がなくなくなった浦賀港に、静かな時間が流れています。

六十年ほど前に、船の上から熱い思いで、この浦賀の町並や山々を眺めた人たちがいました。

浦賀港は、先の大戦終結後、中国大陸や南方諸地域などから五十六万余人の引揚者(軍人、軍属、一般邦人)

を受け入れた引揚指定港であった浦賀指定港の中でも四番目に多い人数でした。

浦賀引揚げの第一船は、現在横浜港に係留されている氷川丸で、昭和二十年十月七日に入港しました。その後も続々と引揚船が入港しましたが、栄養失調やマラリヤ等により死亡者が続出するという悲惨な状況でした。

特に、引揚げが始まって間もなく、引揚船内でコレラが発生し、検疫のため上陸を一時中断させて引揚船を沖止めしました。そして帰還を目前に多くの人が船内や病院で亡くなられ、遺体の多くは検疫所(現在の久里浜少年院)構内で茶毘に付されました。

昭和二十五年三月、初代久里浜刑務所長により、火葬に利用した大谷石を組み込んだ供養塔が建立され、現在も少年院で管理しています。

平成十四年八月に「中島三郎助と遊ぶ会」及び「浦賀探訪くらぶ」が開催した浦賀港引揚船写真展をきっかけに、地元浦賀での関心が高まってきました。供養塔の移築についての要望もありました

が、地元関係者等の熱意とご協力もあつて、当時の上陸地付近であった西浦賀み

※除幕式
十月七日(土)
十時三十分
於・西浦賀みなど緑地
※浦賀港引揚船関連写真展
十月二日(月)〜
十月七日(土)
於・浦賀行政センター

浦賀港には往時をしのぶ史跡がないことから、横須賀市では市制百周年を迎えるに当たり浦賀港が引揚指定港であったこと、そして引揚船内においてコレラが発生して故郷を目前に多くの方々が亡くなられたこと等の歴史を再認識し、恒久平和の願いを後世に伝えるため、記念碑を設置するものです。

記念碑は、上石・中石・基礎石で構成され、材質は御影石で、上から茶系・赤系・白系です。大きさは、基礎石を含めて、幅三・二五メートル、高さ一・五メートルです。

上石は、引揚船として使われたりバティ型貨物船をイメージしています。リバティ型貨物船は、引揚船が不足したため、引揚輸送に用途が立たずいたところ米軍から貸与されたものです。(市民生活課)

今年、祭礼の日に私の家を訪れた友人がこのエネルギーがあれば、浦賀は変えられるよ」と言っていました。

今の浦賀に、誰がいつどんなお札を降らせればよいのでしょうか。(山本)

町の歴史

《漁師町の名残りが》

「鴨居」の地名の由来は、漢字そのまま「鴨」のいるところ、アイヌ語で神を表す「カムイ」が転じたもの、日本語で「鴨」は神様のことで神様の居るところの「かみい」が訛つたものなど諸説があつて確定するのは難しい。また、字名は鎮守様である八幡神社を中心の名付けられているものが多い。例えば、神社のあるところは「宮原」、その東側は「東」、そこから山をひとつ越したところは「腰越」、北側は

鴨居三丁目(脇方)

「語る人」竹内吉澤さん(たけうちストア)

「北方」、西の一番はずれは「脇方」と呼ばれている。

脇方は漁師町として以前はとても賑やかであった。その中通りで一番古いというお店の竹内さん(八代目)に話を聞いてみた。「この先の岬を鳥ヶ



現在の脇方の中通り

また、ここには江戸時代後期から伝承され、昭和四十年代に「とつぴきびーおどり」と呼ばれるようになった仮面里神楽があったが、現在は残念ながら後継者がなく休止状態になっている。

浦賀港引揚記念の碑完成予定図(合成写真)



浦賀文化センター
(郷土資料館)
浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分

所在地:横須賀市浦賀町7-1
電話・FAX:046-842-4121

浦賀文化センターの住所が住所表示変更により10月28日から変わります。
新住所:横須賀市浦賀 7-2-1

東西風

九月の浦賀の祭礼が終わると一気に秋本番。浦賀の町はこの祭礼に全精力をつぎ込みますので、心身ともに秋風が吹くことになりま

しかし、百四十年前の慶応三年、東西浦賀の祭礼からちょうど一カ月後の十月半ばに、西叶神社の前の商店にお札が降ったことから、十二月にかけてもう一度、いや例年の祭礼の何倍もの大きなお祭が行われました。それから四ヶ月後には浦賀奉行所の火が消え、明治維新を迎えることになりました。

今年、祭礼の日に私の家を訪れた友人がこのエネルギーがあれば、浦賀は変えられるよ」と言っていました。

浦賀の植物

ナンジャモンジャの木

ホルトノキ(モガシ) ホルトノキ科

今から十八年前の平成元年三月に、市は天然記念物にホルトノキ(モガシ)を含む自然林を指定しました。それは川間、西浦賀の谷間にある長島さんの裏山に自生しています。



枝を伐られたホルトノキ(モガシ)

大木であつたであろうホルトノキ(モガシ)、今は伐られ幹だけが岩のように立つています(写真)。この地域も都市化・自然環境の変化等により大きな団地が立ち、また住宅開発のため風向きが変わり、乾燥した風と共に強風が吹きつけるようになり危険のためにやむなく伐つたとのこと。また、『直径2m、幹のまわり6mはくだらない』と、きこりさんは言っていましたよと長島さんの言。

この木は強いので枯死することはないと思います。が、伐られた株の前に立つたとき五百年は生きている巨樹に何か圧倒される神秘的なものを感ぜさせる木に思えました。

大前悦宏 横須賀植物会会員 神奈川県植物誌調査員

「これは一体何じやろう?」というので誰かが「ナンジャモンジャ」と言ってしまったことからナンジャモンジャの名前が流布。ですからナンジャモンジャの木は一つの名前を言い表すのではなく、名前がわからないもの、ホルトノキ(モガシ)であつたりカツラ・クスノキ・バクチノキ・ヒトツバタゴなどそれぞれの地域でナンジャモンジャの木と呼ばれたのでしょ

う。共通するのはいずれも巨樹であり「大木」信仰がそこにはあつたとおもいます。花は白色で七、八月にかけて咲きます。果実はオリブとよく似ています。葉は成熟すると紅色になります。ホルトノキは外国産の樹木ではなく千葉南部から神奈川県が分布の北限で主に海岸に近い森林の中に自生しています。国内に二種、横須賀市にはそのうちの一種があります。

蔵書

『道具と暮らしの江戸時代』

小泉和子著 吉川弘文館 道具のリサイクルに

江戸時代の知恵を学ぶ。江戸時代は一般庶民まで生活が向上し、様々な日常生活の道具が発達した。箆筒、樽、厨房具などの家財道具を通して、暮らしや社会を再現。道具の徹底した利用方法は、現代の物質万能主義の社会に警鐘を鳴らす。

『きんぐらいリアムズ』

三浦安針の生きた時代 ジャイルズ・ミルトン著 菊池誠子訳 原書房

色と欲と血にまみれた

歴史 語り座・浦賀

⑧



郷土史家 山本詔一 明治三九(一九〇六)年 六月、浦賀町

長・川島平蔵は町議会の決議に基づき、横須賀線の延長を請願した。神奈川県もこれを受けて、詮議をした上で、浦賀の願いを鉄道局へ上告することを決めた。

鉄道延長願い

う理由から地域住民は鉄道を渴望したのであつた。しかし、鉄道局には浦賀町民の意向はよくわかりませんが、鉄道局として全国でなお一層急を要するところがあり、かつ財政的にも余裕がないので」と断られてしまった。鉄道局があつたりと断つた背景には、明治二八年に認可した相海鉄道の予定路線と重なる部分が多いことがあつた。

相海鉄道は、当時京都にか走つていなかった電気鉄道で、横浜から金沢を経由して横須賀、浦賀、三崎まで通じる計画で認可された鉄道であつた。

この計画に対して、浦賀、豊島、横須賀の町長が合同で、鉄道は道路の中央を走るのか、電柱を立てるのか、車両は一両か連結か、駅を設けるのか、荷物は運ぶのか、など九項目の質問をした。

人家が密集しているところは道路中央を走るが、その他は道路の片隅を走り、架線を張るので電柱を立て、駅を建築するかは未定であるが、荷物より乗客を中心の方向であると答えた。しかし、村を突っ切る。この鉄道には反対者が多くいた。



第7代浦賀町長 川島平蔵

笑話一題

生まれも育ちも浦賀なのに地元の歴史について何も知らなかったことに自分ながら呆れています。縁あつて浦賀文化センターに関わるようになり、必要に迫られて浦賀の歴史を勉強中の身です。センターにある中島三郎助の招魂碑の拓本を見て、小学生

が「中島君だつてーお前のが書いてあるぞー」と叫んでいましたが、今の私と同じレベルです。ちょっとずつですが今まで気がつかないものがみえてきた気がします。これから史跡めぐりに最適な季節が訪れます。おでかけになられてはいかがですか。

日欧異文化交流。その渦中を生きた強烈な人間群像が読む人の心を躍らせる。魅力的な文章を楽しみながら鎖国以前の複雑な対外関係史を理解するのに参考になる。

『暮末のスローライフ』

浜浅葉日記が描く 農民の暮らし 辻井善輔著 夢工房

現代に生きる「スローライフ」の原点を探る！

人々は、めぐり来る季節の変化を受け止めるように、「生老病死」に向き合い、暮らしの中で小さな楽しみを生み出し、安らぎを得て、やがて極楽を信じて死んでいく。人間本来のリズムに合った生き方、暮らし方への時代を越えたメッセージ。